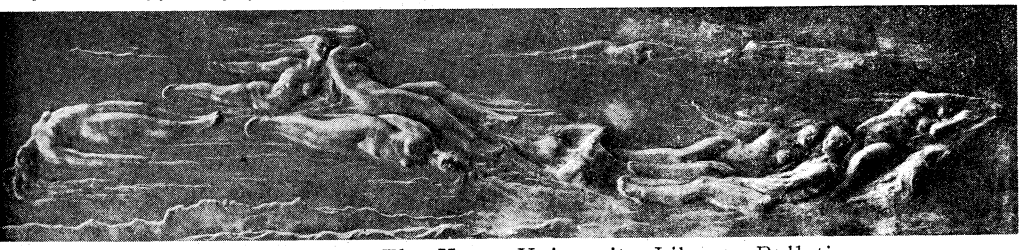
京都大学附属図書館報



# 静脩

1965年 11月

Vol. 2, No. 4

The Kyoto University Library Bulletin

## 本の顔を見る

野　間　光　辰

毎年4月になると，講義始めにきまって学生諸君にいふことがある。「本の顔をよく見ておきなさい」。〝本の顔を見る〟それはこうである。たとえば，講義でも演習でも，或は自分の読書の場合でも，かくかくのことは何々の本に見える，これについては何々を参照せよとあれば，そのまま聞き流し読み流してしまはないで，何かのついででもよいから，図書館なり古本屋ででも一度は必ずその本を手にして，当面の関心の箇所を自分の眼で確かめ，欲をいへばさらにその本の大体の性質・内容まで心に留めておきなさい，といふことなのである。大学4年間における講義・演習・読書の量は，高が知れてゐる。教へられたこと読んだことだけを鵜呑みにして，レポートを書き論文を書いて，それで単位の数だけを揃へて卒業といふのでは，何が大学生だ，何が学士だといひたい。大学4年の生活で最も大切なことは，研究の精神を養なひ研究の方法を身につけることである。研究とは自己の独創を発揮することである。これは何も専門の学問の研究に従事し，将来学究として立つ人だけに限ったことではない。広く実社会に出てあらゆる職場で働く人々にとっても，なくて叶はぬものは研究的精神・独創性である。〝本の顔を見る〟といふことは，つまりそのための一つの自己訓練である。必ず直接に自分の眼で確かめる，本の顔を見知っておく。それだけでも，次の機会に同じような問題に遭遇した時に，或はもっと違った問題にぶつかった時にでも，自分で調べまた考へる材料を容易に蒐集することが出来るといふものである。

近年における新しい傾向として，どこの図書館でも開架方式（オープン・システム）を採用してゐるが，我が文学部の閲覧室では，明治の創設以来，閲覧者による書庫検索といふ形式で，1回生の時から自由に本を抽き出し，手当り次第に〝本の顔を見る〟ことが出来るようになってゐる。（附属図書館の方は卒業論文を書く3回生以上大学院の学生にだけ書庫検索を許されてゐたが，これは全学の学生が利用する性質上資格の制限を加へたのは已むを得ない）。しかしこの書庫検索の制度は，当時他の大学では行はれてゐなかったように思ふ。それは多分現在でもそうであろう。さしあたって調べる目的のない時でも，書庫の中を歩いて自由に〝本の顔を見る〟ことが出来るのは，それだけで大変楽しいことである。私は学生時代から今に至るまで，この〝本の顔を見る〟自由と楽しみを享受してゐるが，これは広く全学の学生諸君にも勧めたいと思ふ。

〝本の顔を見る〟ことのついでに，今一ついっておきたい。自分にとって必要な本は，〝顔を見る〟だけでは済まない。どうしても座右に置きたい。それが人情である。買へなければ写す。出版が比較的盛んであった江戸時代でも，多くの人は本を借りて来て自分で写したものである。ところがこのごろの学生は，といふのは私の実際の経験をいふのであるが，演習・購読のテキスト或は参考書でも，自分で買ひ求めないで，附属図書館から借り出して1年間間に合はせてゐる者がある。もっとも本の高価な時節だから，已むを得ないといってしまへばそれまで，これでは他人迷惑である。〝本の顔を見る〟ことの外に，〝本を写す〟ことも勧めたい。当節は写真またはゼロックスによる複写が盛んであるが，それも出来ない時には，自分で書写するだけの情熱があって欲しいものである。

（文学部教授）